

(様式 17)

## 学位論文審査の概要

博士の専攻分野の名称      博士（医 学）      氏 名 杉山未奈子

	主査	教授	橋野	聡
審査担当者	副査	教授	大滝	純司
	副査	教授	有賀	正
	副査	教授	渥美	達也

### 学 位 論 文 題 名

Sterilization of the access port of CV catheters using povidone-iodine decreases incidence of catheter-associated bloodstream infection

(中心静脈カテーテルにアクセスする際のポビドンヨード消毒はカテーテル関連の血流感染症を減少させる)

本研究では、小児悪性腫瘍に対する化学療法や造血細胞移植療法施行時に、中心静脈カテーテルアクセス時の消毒を、83%アルコールと10%ポビドンヨードの両者で検討し、カテーテル関連血流感染症に変化があるかどうかを検討した。その結果、10%ポビドンヨード使用時のほうが、血流感染症の頻度が有意に減少していた。特に、固形腫瘍の症例と5歳以下の症例で有意に低下していた。特筆すべきことは、10%ポビドンヨード使用時には、*Bacillus cereus*によるカテーテル関連血流感染症が1例も認められなかったことである。

審査にあたり、試験デザインがIRBで承認され患児及び代諾者の同意を得た前向き介入研究かどうか、消毒業務がマニュアルにより診療科内で統一化・標準化されていたのかどうか、両群間の結果を比較するにあたり背景因子を揃えなくてよいのか、固形腫瘍患者でのみカテーテル関連血流感染症が減少した理由は何か、5歳以下の小児でのみカテーテル関連血流感染症が減少した理由は何か、小児がん拠点病院になって患児の内訳が変化したことが結果に影響してないかなどの質問があったが、申請者は、いずれの質問に対しても、自らの研究内容と文献的考察を交えて、適切に回答した。

この論文は、患児の絶対数が少ない小児悪性腫瘍診療において、中心静脈カテーテルにアクセスする際の10%ポビドンヨード消毒により、カテーテル関連血流感染症の発症を減少させたもので、本研究の独創性と先端性は高く評価された。今後、中心静脈カテーテルのスキンドレッシングにも改善の余地がないか検討することや、口腔内環境の違いなども検討し、本研究の結果とも併せて、小児悪性腫瘍患者の感染症発症低下に繋がる研究として発展していくことが期待される。

審査員一同は、これらの成果を高く評価し、大学院課程における研鑽や取得単位等も併せ、申請者が博士（医学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと判定した。